

『ダーウィンとガラパゴス』

伊藤 秀三

長崎大学名誉教授

日本ガラパゴスの会 会長

1835年9-10月、ビーグル号はガラパゴス海域を36日間調査航行し、26歳の青年チャールズ・ダーウィンは陸上では4島9ヶ所で20日10夜を過ごした。彼はビーグル号航海記(1845)のガラパゴスの章に「神秘中の神秘一種の新生について手がかりが得られると思う」と書いた。

またダーウィン上陸百年を記念して1935年にサンクリストバル島に建立されたダーウィン胸像の台座には、「ダーウィンはこの地の生物分布の研究によって、生物進化の思想に導かれた。かくして思想革命が始まった」と刻まれている。そしていまダーウィンの業績を記念し継続すべく、サンタクルス島には国際NGO/チャールズ・ダーウィン研究所が1964年に設立され、半世紀にわたって研究と保全を進めている。

ガラパゴスのことを記述するダーウィンの著作には、「ビーグル号日記(1933,1988)」と「ビーグル号航海記(1845)」と「種の起源(1859)」がある。「日記」の中のガラパゴスの記録には、日々の行動のほか、それぞれの場所の火山、植物/植生、動物生態が書かれている。「航海記」では、これらの記述に加えて、彼が採集した標本を専門家が調べた結果が書き加えられている。「日記」や「航海記」に因んで、現在では、島・火山・湾・湖・生物にダーウィンやビーグルの名を冠するものが数多くある。ガラパゴスはエコツアーの先進地で、そのいくつかにはいまは観光船が巡航し、探訪者16人に1名のナチュラリストガイドが配され、無人域にまで踏み込んで高度な解説をする。

(この講演では、現地映像を用いながらダーウィンの見聞と記録を読み解いていく。)

「日記」や「航海記」を調べていくと、上掲の「神秘中の神秘・・・」は、「航海記」の最初の原稿にはなく、採集標本を各分野の専門家が研究した結果を知らせて貰って、その後書き加えられ、定版の「航海記(1845年刊)」の文章となったことが明らかとなっている。しかし「航海記」の「ガラパゴス」の章を選んでこの文章が書き加えられたことは、ダーウィンがガラパゴスの生物たちに注いだ関心と注目と情熱を表していて、特記するに値する。

ダーウィンの「航海記」と「種の起源」を越えて、ガラパゴスはいまでも生物の進化と生態に関する世界第一級の自然実験場であり、汲み出すべき科学知の源泉であり、ダーウィンと生物進化論の聖地である。チャールズ・ダーウィン研究所はその中心にあって、研究と保全に挑戦し続けている。

* * * * *

私の講演に関連するWeb サイト：

(伊藤秀三ガラパゴス映像) <http://gallery.lb.nagasaki-u.ac.jp/galapagos/jp/>

(菊の大木スカレシア) http://matsushita-flowerprize.or.jp/f_expo90/kouen.htm#16_01

(日本ガラパゴスの会) <http://www.j-galapagos.org/>

(ダーウィン財団/研究所) <http://www.darwinfoundation.org/>

推薦文献：(ガラパゴスに関連して)

西原弘・伊藤秀三・松岡数充 2008.ガラパゴス諸島、世界自然遺産第1号登録地の栄光と挑戦. 地球環境 13巻1号41-50頁. (社)国際環境研究会.

ヘンリー・ニコルス(佐藤桂訳) 2007.ひとりぼっちのジョージ. 298頁+10頁. 早川書房.

伊藤秀三 2002.ガラパゴス諸島ー世界遺産, エコツーリズム, エルニーニョ. 257頁+12頁. 角川書店.

ジョナサン・ワイナー (樋口広芳・黒沢令子訳) 2001.

フィンチの嘴. 472頁+10頁. 早川書房.